

## [新収品紹介]

## 土佐光起筆「林和靖梅鶴図」(三幅対)

絹本着色 (各)96.5×37.8cm

当館では、近年、近世絵画の蒐集に力を入れてきましたが、ようやく作品数も増え、江戸時代の絵画展を前期と後期の二期に分けて展観できるようになりました。ここに、ご紹介いたします土佐光起筆「林和靖梅鶴図」も、江戸時代前期の絵画展で初公開された新収品の一つです。

この三幅対の中幅では、顎髭をたくわえた老人が、道服を纏い、髪を括り頭巾に包んで、竹を組んだ椅子に片膝をのせて座っている姿が描かれています。しかし、この一幅だけではこの人物が誰であるかは分かりません。ただ、手にする杖に依り懸って、遠くを眺め、思いを巡らしているような表情から、名のある高士であろうと推測できるだけです。左右に鶴と梅を伴って初めて、西湖の孤山に居を定め、梅と鶴をこよなく愛して悠

々自適の生涯を送ったと伝えられる中国宋時代の詩人、林和靖であることが分かります。いましも一篇の詩が生まれようとしているところでしょうか。

三幅ともに、細線によって丁寧に描写されており、鶴の毛描きや梅の枝先にいたる細部にまで、この画家特有の繊細な感覚が行き届いています。心地よい緊張感をもたらす線描と抑制された淡い彩色は見事に調和し、画面に高い品位を与えています。各幅にはそれぞれ「土佐左近将監光起図之」の落款が記され、「土佐左近将監光起印」の朱文方印と「土佐光起之印」の白文方印が捺され、土佐光起の作と分かります。

作者の土佐光起は、元和三(1617)、土佐光則の長子として堺に生まれました。承応三(1654)、三十八歳のときに左近将監に任ぜられ、

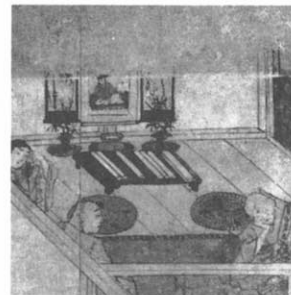
鳴鶴図 文正筆  
相国寺蔵

永禄十二年(1569)以来失われていた宮廷の絵所預となり、土佐家を再興しました。この年、内裏造営に参加し、念願の京都画壇への復帰を果たしています。まさに土佐派中興の祖と呼ぶに相応しい人物です。天和元年(1681)、法橋に叙せられ、常照と号し、さらに貞享二年(1685)には法眼に叙せられました。

光起は土佐派の伝統にもとずいた大和絵的な作品を描く一方、墨調を活かした水墨画や風俗画など、様々な分野の作品を制作し、土佐派の画域を広げました。ことに、中国・明時代の写実的な作品から精緻な画風を学び、鶉図を好んで描いたことで有名です。

この三幅対の左幅、鶴図にも中国絵画学習の跡がはっきりと表われています。京都の相国寺に、「鳴鶴図」という双幅の作品がありますが、その左幅とこの鶴図は実によく似ています。まさに、もともなかった原図ではないかと思われるほどです。異なるのは、鶴の姿が反転していることや、「鳴鶴図」では鶴が満月を仰いで鳴いているのが、この図ではその満月が消え、鶴も嘴を閉じて鳴くのを止めていることぐらいです。

「鳴鶴図」は、文正という画人の描いた作品で、相国寺六世絶海中津が明から帰国の際に持ち帰ったと伝えられます。当時から唐絵の名品として知られ、当館の所蔵する探幽縮図の中に「鳴鶴図」の双幅が見出せるように、土佐派の光起だけでなく、狩野派や琳派の絵師達もこの作品から学んでいま

慕帰絵(第5巻第3段)  
西本願寺蔵

す。この後ろを振り返る姿は鶴図の定型の一つにまでなりました。特殊な例ではありますが、意外に早い時期から中国の明時代の絵画が日本の絵師達に影響を与えていることが分かります。

しかし、これらの作品と比較しても、本図ほど忠実に写した作品はあまり例がありません。源氏絵などの細密画に習熟していた土佐派の画人であったからこそ、ここまで描けたのでしょうか。この一幅だけでも、大和絵の継承者であり、宮廷の絵所預を務める光起が、中国絵画をいかに熱心に摂取していたかを窺うことができます。林和靖の顔に見られる隈取りや、衣文線に添えられた白色のハイライトもこのような中国絵画から学んだものかも知れません。

この作品を考える上で、もう一つ、三幅対の形式をとっていることにも、注意する必要があります。ここで想起されるのは、西本願寺に所蔵される「慕帰絵」第五巻第三段の場面です。覚如上人が自歌集『閑窓集』に収める和歌を苦吟する姿が描かれていますが、その床の間には、柿本人麻呂を中幅に、左右に竹と梅を配した三幅対が掛けられています。

柿本人麻呂は歌聖として、歌人に崇められ、画像を制作して御影供が営まれました。同様に、本作品は漢詩に志す人物によって制作が依頼されたのではないのでしょうか。描写だけではなく、その形式まで和漢の混交が見られる興味深い作品です。(中部義隆)

林和靖梅鶴図(左幅)



同(中幅)



同(右幅)



季刊 美のたより No.95

平成3年5月16日

発行 大和文華館